

## サミシイオモイ<sup>1</sup>

—— 〈話トリエ〉のなりたちにさかのぼって——

W-atelier01■阿部安成、石居人也「あれからずっと、あれから、ずっと—国立療養所大島青松園在住者の顕彰碑をめぐるその後」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.211、2014年6月。

W-atelier02■本稿。

阿 部 安 成



わたしたちは、癩そしてハンセン病をめぐる療養所での調査と研究にかかわって、聞き取り工房〈話トリエ〉を設けた<sup>2</sup>。わたしたちのフィールドは、国立療養所大島青松園がある香川県高松市庵治町の大島である。〈話トリエ〉には、参照した先行事例があった。現在のハンセン病療養所に暮らすひとたちの話を聞くということであれば、そうした調査の手法や会合の実施はわたしたちの創見ではないし、わたしたちが嚆矢でもない。わたしが参照した事例は、ある場所で定期開催されている「座談会・ハンセン病回復者と話しませんか」と題された会である（以下たんに座談会とする）。

ある場所などともってまわった書き方をした1つの理由は、会場となっている公共施設と座談会実施団体とは、おそらく、たんに場所の提供者と利用者であるにすぎず、一方で座談会実施団体構成員がその公共施設の運営をどのように考えているのかわたしにはわか

<sup>1</sup> 本稿は、2013-2014年度滋賀大学サバティカル研究制度、日本学術振興会2014年度科学研究費基盤研究(C)「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(課題番号26370788、研究代表者石居人也)、福武財団第9回瀬戸内海文化研究・活動助成「ハンセン病療養所に〈話のアトリエ〉を編む」(研究代表者石居人也)による研究成果の一端である。

<sup>2</sup> 工房〈話トリエ〉については本Working Paper Series No.211の阿部、石居「あれからずっと、あれから、ずっと—国立療養所大島青松園在住者の顕彰碑をめぐるその後」(2014年6月)を参照。

*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

らないために、公共施設からも座談会実施団体にとっても部外者となるわたしが、なにかしらの憶測を招き寄せる事態は避けたほうがよいと判断したからで、もう 1 つには、座談会で話された内容をおおまかにであれここに記録し、それへの評言を書き連ねるにあたって、やはりなにか憶測を抱かせる恐れがあると感じ、わたしの筆力では避けられないであろうそれが生じたばあいへの配慮によって、率直ではない記載にしまっているとの自覚がある。(もっともこうした書きぶりがかえって余計な憶測を引きよせるかもしれない)

一般に、参照や引用にあたって出典を明示することは、1 つには剽窃をふせぐためであり、もう 1 つには、原典を成果として共有することと原典にあたって議論を検証することとを確保するための約束事だとおもう。わたしが出席した座談会は、おそらく公式には記録をとっていないだろうから(出席者のなかにはあらかじめ断ったうえで録音していたものがあったが)、座談会の内容は確かめにくくなっている。録音されたり筆記されたりしなかった声は残ることが稀で、しかもことさらにインタビューをおこなうとの場を設けないかぎり、会話、談話、懇談、雑話などといった話はなかなか残してゆくことがむづかしいテキストなのである。あらためていうまでもないことだが。

話そのものが残りにくく、のちにそれそのものを参照することが困難なのであれば、いっそのこと書誌情報にあたる座談会のいくつかの属性を示さずに、その非(不)開示という処理を逆手にとって、だれが(氏名)、といった情報よりも、話そのものとそれによってあらわれたその後のようすへ意を注ぐように、話や談というテキストを編成する試みをおこなうこととする。

さらに今回は、「ハンセン病回復者と話しませんか」と呼びかけられた座談会において、「ハンセン病回復者」よりも、彼ら彼女たちと「話」すほうの聞き方や応じ方を聞きたい。話をめぐるだれか、という情報は、ここでは、「回復者」かそうでないか、話題を提供する主となる話者なのか応答するものたちなのか、との違いを明示するていどで、氏名はインシヤルすら記さないこととした。もっとも自由参加という不特定多数が集う場なので、自己紹介があったとしても名乗らなかつたり、名乗ったとしてもそれを書きとめておかなか

*series* 話トリエ 02*W-atelier02*

ったりなど氏名が判明しないばあいもあった。それでもかまわない。ここでは、聞き取りという調査方法を検討するための手始めとして、氏名を明示せずに、あるいはそれを問うことをせずに話を考える試みを展開してみよう。

本稿で提示する論点をあらかじめ記しておく、それは、「回復者」ではなくその話を聞くものたちのその聞き方となる。これまでわたしの座談会出席はわずか 2 回ながらも、それらの場で得た感覚が〈話トリエ〉の構想と課題につらなっている。それを確認することがこの小文の目的となる。



わたしが出席した座談会は、2013年10月5日と2014年3月1日に開催された回だった。前者には「聞き書き」のあり方についてともに考える」との題がつけられ、後者はひとりの在園者の話を聞く回だった。以前から開催されていることは知っていたこの座談会への出席を決めたきっかけは、前者の回が「聞き書き」を主題としたところにあった。

2013年10月開催の座談会で話題提供者は20編の著述(図書や論文など)をとりあげて、それぞれの「聞き書き」にかかわる手法や論点を示した。ていねいにノートをとったわけではないので、かんたんなメモと覚えているところから記すと、ここでの論点はおおまかに2つあったようにおもう。1つが事実、もう1つが名まえである。

この座談会で、わたしが執筆した稿が2つとりあげられた。本 *Working Paper Series No.142* (2010年12月)の「だって当事者がそう言うものですからーハンセン病療養所における聞き取りの手立て」と同 *No.154* (2011年8月)の「わたしたちは、彼らふたりの名を記さなかったー癩そしてハンセン病をめぐる療養所での在園者との語らいを考える」で、後者の稿はその論題にもあるとおり、聞き取りをする相手の名のあつかいがそこでの主題の1つとなっていた。

もとよりその稿での論点は、たんに実名がよいか匿名がよいか、どちらにするべきかといったことではなく、話者の名を明示しない文章において、なぜ、たとえばA氏や入所者

*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

Bさんやさんに E などと表記するのかを問いつつ、(いまおもうと)、話しを聞き取る相手の名の示し方をおして、在園者という個をどのように考えるのかを議論したかったのである。いまも残る差別、といういい方であらわされる事態への配慮として聞き手は話し手の名を伏せるという処理をするのだが、それでもなおアルファベットのイニシャルでそのひとを表示してしまうところに、そのひとの個別性を手放してしまっは、どうにも、療養者をとりあげたことにならないという切羽詰まった表現意思とでもいうべきようすがあらわれているようにおもう。そのひとが生きてきた固有のありようを、療養者や入所者という集合性に回収させてはいけないという使命感すら、わたしは、あの A や B という表記に感じるどころがあった。



とりあげられた 20 編の著述の著者で座談会に出席したものは、話題提供者とわたしだけだった。せっかく来ているのだからと発言をうながされたわたしは、自分では聞き取りを調査や研究の手法としてほとんど用いていないこと、聞き取りで語られた内容からなにを引き出すのか、とりわけそのなにかをかんたんに事実とってしまっはよいのか、そして、聞き取りをめぐるこうした注意は当然、文字史料の読み方を再考することとなる、といった趣旨の発言をしたようにおもう。

わたしの発言もふまえた座談会出席者の一言ひとことが、素直におもしろく (愉快ということではなく、興味ひかれる、考えるよううながされる、ということ)、また考えるべきことがらをはっきりと指し示していたと感じた。ひとりの在園者は、たとえば、わたしの稿の論題「わたしたちは、彼らふたりの名を記さなかつた」に即して、名まえを記されなかつたひとたちはそれを残念におもわなかつたかな、といったことを述べた。これには虚を衝かれた感じがした。それはまったくわたしの念頭にうかばなかつた気がかりだった。ここにいう残念とは、名を記されることを荣誉とおもうといった感慨とはべつな思いだろ。この点が議論されるにいたらなかつたが、もしかすると記録されることへの渴望のよ

## series 話トリ工 02

## W-atelier02

うな意思が彼女にはあったのかもしれない。名を記さなかったがために、さみしい思いをさせてしまっていないか、ということか。

他方でもうひとりの出席者は、自分では取材をうけるときはいまでもけして本名を明かさないといいた。このひとはすでに軽快退所したいいわゆる社会復帰者だ。もはや若いとはいえ、それなりの年月を社会で生きてきただろうひとが、いまだにといいてよいほどに、本名を名乗れないというのだ。そこには親族への配慮があるという。療養所に生きたものにとっては、(たとえ退所したとしても)、聞き取りや取材にさいして、どういった中身の話をするかではなく、名まえが出るかどうか「決定的」に重要だという趣旨のことを、彼は述べていた。



いま療養所についていくにんかの在園者から話を聞けば、いまだに本名を明かせないほどに忌避や排除といった差別があると、当事者が感じていたり体験したりしているようすが容易にわかる。だからさきに聞きたいまも本名を名乗らないという退所者の意思は療養所を訪ね、そこで話を聞いているものにとってはさして珍しいものではない。だがあらためて、療養所を退所して社会に暮らすものから本名を名乗らないという自己に課した注意を聞き、この座談会の場では彼の口調が、彼のなかに依然として残るわだかまりをわたしに報せたように感じた。ここでは談話を文字におきかえたときに記録されにくい、声の調子や話しぶりにわたしの耳が<sup>そぼだ</sup> 敬てられた体験として、それを記録しておこう。

彼にはなにかしら満たされず信じることのできない<sup>つか</sup> 間えがあるのだろう。そうした<sup>ほぐ</sup> 解されない<sup>こ</sup> 凝りが彼の気持ちにあるように感じさせる口調だった。それは家族あるいは親族への硬くなってしまった思いである。このわだかまりは、在園者たちがいうところの社会の頑なさが<sup>ほぐ</sup> 解れていないことのあらわれとそれへの違和や反撥のあらわれである。だが彼はそれを声高に訴えはしなかった。彼が家族といったか親族といったかはっきりとは覚えていないのだが、かつてであれば血族といわれた血のつながりのあるものたちへの彼自身の

*series* 話トリ工 02*W-atelier02*

配慮が、いまも、本名を名乗らせないということなのである。

彼の意を汲んで、話者である彼を回復者 N や復帰者 K と仮に記したとき、能年だか狩野だったかもしれない彼の明かせない名を、わたし自身がもういちど、べつ的手段で、秘匿してしまったように感じてしまう。

もちろん、ここにはぎりぎりの逡巡と選択とがあるともいえる。本人の意向を尊重して、または、その気持ちを忖度して、その名を明示しないが、しかし、彼にもあたりまえのことだが名があることを示すためにアルファベットを用いたとか、その名があるのに、それを知っているのに、まるでないかのように記さないことはできないとか、名乗れないにしてもせめてその痕跡をとどめるためにもアルファベットでその名の一部を記したとかいうこともできるだろう。ともかくもなにかしらの表音文字を与えることで、療養者一般という集合性に紛らわせてしまうのではなく、ほかのだれでもない R という人物が確かに療養所で生きたのだと記録するぎりぎりの手立てがこのアルファベット 1 文字に籠められているのだと理解できるかもしれない。

そう考えられる展望があるかもしれないところでなおわたしには、A であれ YA であれ、1 文字ないし 2 文字に切りつめられた名が、その生すらもが短縮されてとらえられ表現されているようすのあらわれにみえてしまうのである。これはたとえば、Y.Abe という表記とはまるで異なるはずなのだ。

さきに書いたとおり、イニシャルを用いてでも仮名を記す表記法は、話者となった療養所在住者を個としてとりあげようとする姿勢と意思のあらわれにもみえるのだが、他方でそれは、隔離された療養所で、まず、偽名あるいは園名と呼ばれる名をみずからにつけなくてはならなかった手続きをなぞっているか、それとは異なる方途を模索することすらしなかったように感じさせる余地を残してしまう。だから、わたしはイニシャルという表記の仕方に躊躇するのである。

萩野千尋も、彼女が迷い込んだ (spirited away) 異界で生きてゆくには、湯婆婆に名を奪われたうえで与えられた「千」と名乗らざるを得なかった (もともと彼女は異界での前

*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

進の一步となる契約書への署名で自分の名を誤記する粗忽ものでもあった) <sup>3</sup>。ハクとともに元の、実の名をとりもどすことが、異界に生きる千の生的一端だった。他方で、DEATH NOTE は、名と顔とが知られることで死の恐れが強まる危機を現世にあらわした<sup>4</sup>。名が、ひとの命運も生死をも左右する危険な記号となれば、それを秘匿しなければならない。『DEATH NOTE』の主人公のひとりである L とは、そうした事態のあらわれである。

名をかえて、奪われて、失って生きてきたひとたちのその名をどう記すか。伏せてよしとするだけではない思索が必要である。名まえ 1 つと <sup>あなた</sup>悔ってはいけない——とは療養所を訪れた多くの調査者、研究者、ボランティア、ジャーナリストが感じ、唱え、訴えてきたところだろう。それをもう 1 つつぎへとすすめるために、名まえの書き方の思索を示す努力が必要だ、とわたしは考える。

生まれたその少しあとにつけられた名を使えないままに生きたものたちの、そのかけがえのないであろう名をなにか記号におきかえてよしとするのではなく、なにかほかにおきかえられない療養者の生の 1 つひとつをおもいやりつつ、わたしたちがなにかを選びとって歴史を記すその逡巡と覚悟を記録することもまた、わたしたちの作業なのかとおもう。



2014 年 3 月開催の座談会は、ひとりの在園者が話題提供者となった。出席者はほかに、在園者がひとり、社会復帰者がひとり、療養所に暮らしたことの無いものがわたしを入れて 5 名いたようにおもう。

話題提供者の女性は、2 年まえに「自分史」を上梓していた<sup>5</sup>。その内容にそって、彼女の「半生」が語られた。彼女の生にこそ、凄惨を極めたとの形容がゆるされるといってよ

<sup>3</sup> 『千と千尋の神隠し』(宮崎駿監督、スタジオジブリ制作、東宝配給、2001 年公開)。

<sup>4</sup> 『DEATH NOTE』全 12 巻(大場つぐみ原作、小畑健作画、集英社、単行本 2004 年～2006 年、初出『週刊少年ジャンプ』2003 年～2006 年)。

<sup>5</sup> 『支えられての半生』(「自分史塾・エッセイ塾」主宰瀬谷道子制作、2012 年)。同書は図書検索データベースの CiNii Books、NDL-OPAC、webcat Plus、東京都立図書館統合検索のいずれでもヒットしなかった(2014 年 6 月 21 日検索)。国立ハンセン病資料館図書室でのみ閲覧可かもしれない。

*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

いほどに、その半生に籠る苛酷さが、本人による話を聞くわたしたちに伝わってきた。発症後もしばらくは生家で過ごした彼女を、母親は手厳しく育てた。手が不自由であっても食事は自分でしなければならない。自分の食事のようすを、犬のように、と語ったようすを覚えている。からだの不自由なのだから、なおのことひとの何倍も努力をしてあれこれできるように育てられた。

そうしたようすが「自分史」では、「母には「お前は自分のことが自分で出来ないと困る。親はお前より早く死ぬ。兄妹は他人と思え。当てにするな」と厳しく言われていた」「服が破れても自分で繕えと突き放した。意地でやりこなした。母のお陰で自転車に乗れるようになり、針仕事も出来るようになった」と記されている。

また、療養所に入ってからのこととして、外へ買い物へ出かけ、そこでの出来事が回顧された場面でも、わが身の来し方が記されている——「もう五十年身障者で、毎日が自分とのたたかいだった」「母には、障害を背負った者がこの世を生きていくのは大変なことであり、親兄妹だって生涯と一緒に面倒をみることはできないのだから、どんな事があるかが自立しなければいけないと言い聞かされてきた」「子供の私には生きる難しさなど分かるはずもなく、泣くばかり。母は鬼ではないかとさえ思った事もあった」「健常者が一時間かけて出来る事を、二時間、三時間、五時間とかけてやった。それで出来なければ一日かけてやればいい」——彼女のこうした自己の体験を語る言葉が、それを話すようながした「生まれつき脳に障害をもっていて、自分のことが自分で出来ない」子をもつ母を衝き動かした——「手助けすることが愛情と思い、娘の将来のことを考えず手助けしてきました。これからは一緒に苦しみながら今日のお話を明日の希望に変えて頑張ってみます」。おそらくその母にとって自分たちがかろうとするきっかけとなった鍵の言葉が、「自分とのたたかい」「自立」「母は鬼」だったろう。

座談会での彼女の話は、文字となって記録された「半生」よりもいっそう苛烈な内容だった。たとえば、針に糸をとおすのがむつかしかったが、10回やってできなければ20回やる、それでもだめなら30回やってみるという努力で、針もミシンもあつかえるようになって



*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

たという。ひとができるこは、自分でもできるようにした、と聞いたとおもう。艱難辛苦の半生において、彼女が克己をわがものとしたと伝わってきた。しかもそれが、朗らかにうれしそうに話される。そういう語り口で提供された話題に対して、出席者のうちのふたりは拍手をもって讃えた。賞讃されたのは、彼女の克己の軌跡だとわたしは感じた。



座談となったところで、さきの回にも出席していた社会復帰者は、自分はいまでも本名を名乗れないとくりかえした。彼の親族への配慮は、この日の話題提供者にとってもおなじで、彼女は、家族のために療養所にいたいとおもった、とかつての心情を話した。家族や親族のためにみずからの身を療養所におくという仕儀や判断は、多くの療養者につうずる選択だろう。

また、家族をおもってのことにとどまらず、自分自身のことであっても、たとえば、社会復帰したのちに本病とはべつのことと診察をうけるときにも、病歴としてのハンセン病を話せないことがあったとも社会復帰者は語った。

もうひとりの在園者は、社会復帰ののちにふたたび療養所で暮らすことを選び、いま生活の場が療養所となったとの経緯を話した（ほかの園でもいまこうした再入園があるときいた）。そこには語られなかったいろいろな事情があり、あらためて療養所を選んだのだろうが、しかし、たとえば焼肉 1 つとってみても、寮ではとても気を使うと語った。いまや外部からたとえば電化製品の修理にくるものが、ここはいったいどういう施設なのかと尋ねるほどになったというのだが、集団生活の場での気兼ねは以前とかわらないのかもしれないと感じさせる話だった。

話題提供者も、いちど療養所をでて生活したことを話した。療養所ちかくにマンションを購入して彼女はそこに住み、ときどき園にいる夫がきたのだという。それはそれで口さがないひとたちの噂の的になったとのこと。夫が亡くなったのちに療養所に戻ればそれはまたあれやこれやの世間話の種にされたともいう。でも彼女は、気にしない、と快活に過

*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

去をふりきっていた、とみえた。

この日の座談では、療養所を生きたものたちの生がはっきりと対照をもってうけとめられた。陽と陰、明と暗、といった対照で、その違いは拍手の有無に明瞭だった。拍手は前者にだけ贈られた。



この対照は、克己と、固執や拘泥の違いにあるともいえるだろう。座談会の場では、前者に拍手があり、後者にはそれがなかった。とはいえもちろん、わたしもふくめた出席者が後者を無視したわけではなかった。よくいえば、沈思した、感じ入った、深く考えようとした、言葉を失った、などというようすだったのかもしれない。そうだとしてもこれは、あからさまな区別だった。わたしたちは無遠慮にも、また浅はかにも、後者にむきあう術を、その場で、拍手のようにすぐには、話者当人にみせられなかったのだ。

ではどうすればよかったのか、どうすることができたのだろうか。おそらく、1 つには、涙を流すという応答があり得たのだろう（こういうとき怒りという感情はあまり想定できない気がする）。不当な、理不尽な絶対隔離という抑圧と差別に嘆き、悲しみ、また、それがわれわれの仕業だったと自覚したときは恥じ入り、そうした暴虐に闘ったものたちを賞讃してきたのだ（これも、ともに怒る、ということがいまはあまりあらわれないように感じる）。悲惨さには沈鬱な面持ちを、闘争にはともに勝利の凱歌を、ということだ。

わたしたちは、当事者である話者の話を聞くという姿勢をみせながらも、その聞き方は、わたしたちの聞きたいことを、聞きたいように、聞く、という浅薄な態度をとってきたのではないか。わたしは、克己の当事者を表彰台から引き降ろそうとしているのではない。闘争でも克己でも、それをなし得たものたちを讃えることは、それと背中あわせに、それをなし得なかったものたちの生が視野に入らない、それをとらえられない、そうした生にむきあえなくなるという恐れを抱くがゆえに、療養者の生を分断したくないのである。難儀を打開し、窮地を脱し、逆境を生き抜いた生を知って、つい、それを喝采したくなる興

*series* 話トリエ 02*W-atelier02*

奮を鎮めて、療養者の生を記録し理解するその術を更新しようとする努めを怠らぬよう自己に課したほうがよいようにおもう。

1度でだめなら2度、3度、とくりかえしのなかで事態を好転させようとする努力は賞讃されやすい。当然それに値する。それはひとのこころを衝き動かす。行動に駆り立てることすらある。この「何度でも」<sup>6</sup>という諦めない姿勢は共感を呼びやすい。もちろんその成果は大切な果実なのだが、それは本人がじっくりと味わえばよいのであって、第三者はそのおこぼれをありがたがるのではなく、みずからも励めばよいだけのことなのだ。



わたしたちは〈話トリエ〉で、できるかぎり平板な聞き取りを記録しようとして構えている。平板な、という形容で、起伏にとぼしいかもしれないが、日々の暮らしのなかにあらわれた声や話をおもい描いている。ただ、大島でのフィールドワークのあいだずっと、レコーダーをオンにしておくこともできないので、(やってみてもよいだろうが)、録音していないところでの声や話の録取の仕方が、そしてその記述や記録の仕方にも工夫が必要となる。

またわたしたちは、〈話トリエ〉では記録者に徹することとしよう。これは聞いた話の内容からうかがえる当事者の生を讃えないということではない。聞いた話の壮絶さに言葉をなくしたことを隠そうというのでもない。声と話を解釈したり理解したりしたときには、それが明瞭にわかるように記録するということである。どの声を聞いて、どういった話に対して、なにを感じたり考えたりしたのかを、そのきっかけを忘れずに自覚しながら、それをも記録するのである。工房〈話トリエ〉に建屋はない。わたしたちが大島在園者の話や声を聞く場、そこで聞いたことを考える場、その考えを議論する場——それが〈話トリエ〉だ。

インタビュー形式ではなく、できるかぎり普段のようすを、選択に無自覚ではなく、なに

---

<sup>6</sup> DREAMS COME TRUE のシングル曲「何度でも」(作詞吉田美和、2005年)はくりかえされる回数 of 桁が違う。わたしはそこに共感への安あがりな仕掛けを感じる。

*series* 話トリエ 02*W-atelier02*

を記録するのかわつねに念頭におきながら、またその手段を手探りながら、療養所で声と話を記録する——これがわたしたちの〈話トリエ〉である<sup>7</sup>。

そして〈話トリエ〉では、名を記されなかったから寂しい思いをしたのではないとか、話題を提供したのに拍手がなかった話者は淋しかったのではないかなどと推し量ることをしない。付度は念慮や配慮であるが、他方でそれは過度な、不要な、思い込みとなることもある——病んだわたしがいるために、お母さんが悲しい思いをする、だからわたしはこの身を療養所に閉じ込めよう——という母への思いが隔離を実現させた一歩だったから。付度ではなく、名を記されないことを寂しいと感じる機制はなにか、拍手がないと淋しいと感じさせるかもしれないとなぜおもったのか、拍手を贈るとはどういうことかを考えることが、〈話トリエ〉である。

**附 記** 『朝日新聞』2014年6月21日朝刊大阪本社版13版37社会面に、「ハンセン病元患者 高齢化追い打ち」の見出し記事が掲載された（署名は桜井林太郎）。記事は、6月20日に厚生労働省で「国の隔離政策で被害を受けたハンセン病の元患者の名誉回復と追悼の式典」が開かれたこと、今年5月に「偏見と差別のない社会を求める活動を引っ張ってきた指導者を相次いで失った」こと（神美知宏と笹雄二の逝去を指し、「療養所の地域開放や、負の歴史を後世に伝える活動に力を入れてきた」とふたりを評価）を伝え、「深刻なのは、元患者たちの高齢化」だと訴えた。

『朝日新聞』は翌6月22日朝刊大阪本社版13版33社会面にも、「ダークツーリズムーハンセン病療養所の試み」の見出しで、テレビ欄裏の社会面のほとんどをあてた記事を書いた（署名は「編集委員・高木智子」）。記事には、かなり大きな文字で「隔離の島／学ぶ旅」の見出しがあり、「全国の国立ハンセン病療養所一覧」の地図と各療養所の「主な特徴・遺構」、「各療養所自治会のダークツーリズムへの賛否と理由」、また「ダークツーリズム」

---

<sup>7</sup> こうした課題のすべてを盛り込めたわけではないが、〈話トリエ〉の作品として、国立療養所大島青松園のキリスト教霊交会がおこなった、創設者三宅官之治の墓前礼拝をめぐる記録がある（前掲阿部、石居「あれからずっと、あれから、ずっと」）。

*series* 話トリ工 02*W-atelier02*

(以下 DT とする) についての解説がある。

DT とは、「人類の悲しみの場をめぐる旅」として、英国の学者が 1990 年代後半に提唱した形態のツアーで、「ポーランドのアウシュビッツ収容所やウクライナのチェルノブイリ原発、広島原爆ドームへの旅が代表的で、死者を悼むとともに、悲しみを共有する観光の新しい取り組みだ」という。近年の動向として、「熊本県の水俣や沖縄県の戦跡などが定着しているほか、東日本大震災後の東京電力福島第一原発周辺や津波の被災地も対象としていく動きがある」ともいう。記事が伝える近況に照らしていえば、DT で訪れる場所は「死者」だけでなく、いまも、そこで、生きて、暮しているひとたちがいる場でもあることとなる。ハンセン病療養所も、高齢化が深刻な問題だと危惧される暮らしの場である。

記事冒頭では、「隔離の歴史を刻むハンセン病の療養所を、人類の負の足跡をたどり、悲しみを共有する旅「ダークツーリズム」の受け皿にしようという試みが始まっている」とまず紹介し、ついで、「多くの入所者の人権を踏みにじってきた「負の遺産」を継承する狙いだが、観光地化で好奇の目にさらされることへの懸念もある」との注意点も示された。

では、13 箇所の国立療養所でなにが DT の対象となるのか——栗生楽泉園（群馬県）「重監房資料館／一部復元された重監房（特別病室）」、長島愛生園（岡山県）「収容棧橋や収容所など／歴史館」、沖縄愛楽園（沖縄県）「退避壕／米軍の空襲に備え、患者達が掘った」、大島青松園（香川県）「解剖台」と 4 園のそれが写真つきで示され、他方で、松丘保養園（青森県）、星塚敬愛園（鹿児島県）、奄美和光園（鹿児島県）にはなにも記されていない。東北新生園（宮城県）の「死者を追悼する千本桜計画」はこれからののだろうし、多磨全生園（東京都）の「国立ハンセン病資料館（隣接）」は「特徴」といってよいのだろうが、図書という遺産があると強調したほうがよい。

自治会が表明した DT への「賛否と理由」は各園の「主な特徴・遺構」とは連動していないようにもみえる。重監房資料館が今年 2014 年に開館した栗生楽泉園は、「×」の理由を「入所者の生活の場を観光と位置づけることはあり得ない」と示した。やはり資料展示館のある菊池恵楓園も「×」で、「観光感覚では深く学べない。入所者の体験談をじっくり聞

*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

いて」ともとめる。「主な特徴・遺構」が記されなかった星塚敬愛園は、「×」の理由を「永久に残したいが、旅行や観光形態が適切かは疑問」と呈した。「戦争中の弾痕の残る塀など」を「主な特徴・遺構」とした宮古南静園（沖縄県）は、「生活の場だから入所者の尊厳を守る配慮が必要。宮古島観光の人でも学びに来るなら対応する」が、しかし「×」、と回答した。

13園のなかで「×」はさきの4園、「△」が3園で「観光には無理がある」（松丘保養園）、「鎮魂の場と踏まえて来てほしい」（東北新生園）、「物見遊山のおそれも」（多磨全生園）をその理由としてあげ、「○」は6園とほぼ半数にのぼった。沖縄愛楽園と大島青松園は、「人権と平和を学ぶ修学旅行を受け入れている」（前者）、「瀬戸内国際芸術祭で訪れた人がハンセン病を知る契機となった」（後者）と、これまでの実績をもとにDTへの賛同を表明した。「これまで関心のなかった人たちに訴えられる力がある」（長島愛生園）、「隔離の歴史を後世に残せるなら。来園者が増える助けになる」（奄美和光園）と今後の展開への期待がある一方で、「負の遺産が残っており今後観光的な面が出てくるのはやむを得ない」（邑久光明園。遺構は監禁室。岡山県）と全面賛同ではない渋面をみせる療養所もある。

記事はまた、いくつかの談話も載せる——「愛生園に併設されている歴史館の学芸員」の談話として、「入り口が観光であってもいい」、「世界遺産のブランド力は大きく、関心のない人も振り向かせることができる」と、世界遺産登録にむけた準備会を発足させた療養所ならではのいわばDT構想をみせ、沖縄愛楽園「入所者の代表」による談話から、沖縄戦による戦禍を体験した療養所としての「人権と平和の二つを学んでほしい」との要望の記事は伝え、「大島で開かれた瀬戸内国際芸術祭に参加した」「現代美術」を専門とする大学教授の談話からは「共感へ最初の一步」との評価を引きだし、さらには、「訪れる側は入所者たちの生活の場であることをわきまえて謙虚であるべきで、受け入れ側もどんな歴史を刻んだ場かを適切に伝えられるガイドの育成に力を注ぐべきだ」との注意点と課題を提示した。

最近のハンセン病報道としては、特大の記事となった。

*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

紙面の多くが割かれた記事とはいえ、おそらく、かぎられた紙面では簡潔に記事をまとめなくてはならず、いろいろな情報を削ぎ落として言葉足らずになる嫌いがあり、しかし他方でかえってそれが現在のハンセン病をめぐる議論の状況をあらわすことともなる。

まず、「隔離の島／学ぶ旅」——列島を国土とするのだから、国立療養所はすべて島にあるといえるかもしれないが、限定していえば、島にある隔離施設だった療養所は、長島愛生園、邑久光明園、大島青松園の3園となる。

その隔離施設だった療養所をめぐる形容の語句は「ダーク」「負」であり、それと「悲しみ」という感情が連動するとあらわされている。差別があったから、抑圧があったから、非人道、理不尽なようすがあったから、その色あいは陰鬱となり、否定形がそれを語る基本形となる。そうした負の様相をまえにした人びとは、「悲しみ」の感情で結ばれるということだ。「悲しみ」は涙を誘い、他方で負を打開したのものたちには勝利への賞讃が贈られる。ここには、差別→克服→生き抜く→差別→克服→生き抜く……という循環があり、くりかえされ絶えることのない幾層もの差別にあっても、それに負けずに生き抜いたからこそ、予防法廃止、国家賠償請求訴訟勝訴、政府陳謝という事態を勝ち得たのだという明瞭な道すじがあり、その各所に非当事者の涙と凱歌と讃辞が寄せられるのである。

このストーリーとその享受の仕方が広く社会で共有されているからこそ、当事者たちも「負の遺産が残っており今後観光的な面が出てくるのはやむを得ない」から、DT への賛否を問われれば○をつけてしまうのである。療養所を訪れたものたちも、「人間扱いされなかったなんて」「寂しい場所にあるんだと実感」「胸が締めつけられるほど話はきつい」といった、「ダーク」「負」という形容にふさわしい感想を寄せ、おそらく選択されたであろうそれらが紙面に掲げられるのである。療養所は暗く寂しくなくてはならない、療養者の生は痛ましくなくてはならないのである。そしてそれがたんなる観光ではなく教育の一環としておこなわれるとき、「胸が締めつけられるほど話はきついけど、学んでおかないといけない」と、けれども——の接続詞が用いられる逆接の感想が導きだされるのである。

あらかじめ「ダーク」「負」が設けられた仕組みのなかで、それに「共感」することはそ

*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

うむつかしくはない。テーマ・パークへ行って楽しかった、ということと仕組みは違わない。これでは、療養所や療養者にみあったそれらの知り方、たずね方、考え方、感じ方を学ぶことはない。「訪れる側」に「謙虚」をもとめ、「ダーク」と「負」への涙をみせればそれは合格となる。他方で、「受け入れ側」には「適切に伝えられるガイドの育成」を課すというとき、その「受け入れ側」とはだれなのだろうか。イベントの興行主なのか、イベント会場がある区市町なのか、療養所なのか、そこに生きる在園者なのか。曖昧だ。

記者は末尾に、今年 2014 年 5 月に長崎を修学旅行で訪れた横浜市の中学生在が、「死に損ない」などと暴言を吐くことがあった」と記して記事を結んだ。部外者のそうした暴力を危惧することも重要で、そのうえでさらに、ハンセン病をめぐる現在の議論の仕組みを問うことも必要だ。

またわたしはもう 1 つ感じる——名称に訝しさが残るものの、DT であれ「負の遺産」であれ「負の歴史」「負の足跡」であれ、その場に立ったときの感情が怒りであっては、なぜいけないのか。

『朝日新聞 DIGITAL』のトップページにある「PR 情報」に「HIV やハンセン病などに対する正しい知識を知っていますか！？～政府広報」の 1 行があった（2014 年 6 月 22 日閲覧）。「政府広報オンライン」》「暮らしのお役立ち情報」》「お役立ち情報」》「HIV・ハンセン病に対する偏見・差別をなくそう」の「最終更新」は「平成 25 年 10 月 21 日」となっていた。見出しが表示されても、発信される情報はかなりのお古だった。

6 月にハンセン病をめぐる追悼式典が催されたり新聞紙面に記事が頻出したりするようすは、かつて貞明皇太后の誕生日 6 月 25 日が特別な日としてあつかわれてきたことの名残のようにも、あるいは、その読み替え更新のようにもみえてしまう。

厚生労働省はそのホームページの「報道発表資料」をとおして、「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」についてを「報道関係者各位」に宛てて通知している（2014 年 6 月 28 日閲覧）。そこには、「平成 21 年〔2009 年——引用者による〕度から、ハンセン病療養所入所者等に対する補償金の支給等に関する法律の施行日である 6 月 22 日を「らい



## series 話トリ工 02

## W-atelier02

予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」と定め、厚生労働省主催による追悼、慰霊及び名誉回復の行事を行うこととしております」と記されている。

この日に関連して四国では今年、「元ハンセン病患者らが暮らす国立療養所大島青松園（高松市）などは 26 日、徳島市藍場町のあわぎんホール（県郷土文化会館）で「ハンセン病を正しく理解するフォーラム」を開き、同園の園長と自治会長（報道表記順）が講演をおこなったと報じられた（YOMIURI ONLINE 2014 年 6 月 27 日「ハンセン病理解へ講演・演劇」同前閲覧）。このフォーラムは毎年おこなわれていたとおもう。

べつにみれば、やはり国立療養所がある東京都では今年、6 月 18 日（水）から 22 日（日）まで東京都庁第一本庁舎 45 階南展望室と同庁舎 1 階アートワーク台座で、「国立療養所多磨全生園についての写真パネル展示」と「ハンセン病についての DVD の上映」をおこなうと 5 月 27 日付でホームページの「報道発表資料」として報じた（同前閲覧）。同ページには「ハンセン病とは」と題された 7 行の説明文もある。



やはり本稿の掉尾で、さみしいという思いにふれておこう。『広辞苑』（第六版）ではそれを（「サビシイの転」とのこと）、「本来あった活気や生気が失われて荒涼としていると感じ、物足りなく感じる意」「欲しい対象が欠けていて物足りない。満たされない」「孤独がひしひしと感じられる」などと説いている。

ひとが話す声には、それに張りがあるとか弱弱しいとか、滑舌がよいとかわるいとか、といった<sup>こわね</sup>声音のぐあいにかかわらず、生きいきとしたようすがある。だれの声にもあるそれは、口をついて話されたとたんに失われてしまう。たとえレコーダーに録音されたとしても、いまだあれば電子化された録音音声は、その生きいきとしたようすとはなにかしら違うべつなもののように聞こえる気がする。ひとが話す声にあるそうした<sup>なま</sup>生の新鮮さこそが、ひとが生きているということなのだろう。それをも、そのままに保存しようとする企ては詮ない仕儀であって、自分の耳とこころに残るなかで、だんだんと鮮度が失われ、い

*series* 話トリ工 02*W-atelier*02

ろいろと欠けていってしまう他者の声（そしてわたしの声も）を反芻しながら、まずはわたしひとりで、過去をたどる手立てをしっかりと思索してゆくということなのだろう。

## ▼「あれからずっと、あれから、ずっと」追記

2014年6月26日(木)、国立療養所大島青松園のキリスト教霊交会代表へ電話をかけて、予定している連続講演会について相談する。啓発活動の1つとして、園側福祉室に提案するとのこと。そうした方途がわたしにはまったくおもい浮かばなかった。福祉室もいろいろと忙しいようなので、というので、今回の講演会実施にあたっては、園側にも霊交会にも面倒をかけないことをあらためて伝えた。

この日に、6月24日付の葉書をうけとった。差出人は、三宅官之治顕彰碑建立発起人のおひとりで、4月にお会いした方。5月1日付でわたしから、大島にある三宅の碑の写真を送った、それへの返礼だった。「この写真は光木の顕彰碑を計画した4人に送ってあげたら、又一入の感動を受けるのではないかと思います。／誠に勝手乍ら、あの写真をあと2枚を私宛に送って頂けませんか。／光木の碑の発起人は4人でしたが、1人死亡の為2枚をお願い致します」と記されてあった。

大島の三宅碑の写真2枚にくわえて、墓前礼拝のときの祭壇をこしらえた碑の写真3枚、それが報道された『毎日新聞』記事のコピー3枚、その記録が掲載された『青松』最新号3部を、7月5日(土)に投函した。

同年6月28日(土)お昼すぎに霊交会代表から電話。ワーキングペーパーが届いたとのこと。そのお礼だった。昭和40年代ころ大島にカキデン(夏期伝道)で来ていたひとが、岡山の教会の牧師と連絡をとって、三宅の墓参にいったとのこと。もうひとり、これまでも霊交会を訪ねているひとが墓参を希望しているという。その方は目がみえない。日程があえば同道することとした。三宅墓参はいまだに〈その後〉をつくりだしている。

*series* 話トリ工 02*W-atelier02*

(追記 2014 年 7 月 7 日) 現場に出かけなければ歴史研究はできない、というつもりはないが、現場にゆくと知り得ることが、確かにある。

7 月 6 日 (日) の高松便 1 便で大島にわたる。乗船者はわたしのほかに、牧師としばしば礼拝にでていた島外の方の 3 人のみ。帰りの便には、わたしひとりしか乗っていなかった。日曜にしてはめずらしいこと。高松港の朝の待合所も閑散としていた。

聖日礼拝は、これまでわたしがでたなかでもっとも少ない人数ではなかったか。牧師、島外の方、わたし、霊交会信徒は 3 名のみだった。司会の代表は、礼拝の報告などで、不在の信徒ひとりのようすにくりかえしふれていた。

礼拝の讃美歌で、「これまで霊交会では歌ったことのない」538 番が示された。これを選んだ理由は、「調べがよい」からとのこと。不慣れなためか、斉唱の音が小さかった。こういう試みもあると初めて知った。

礼拝のあとで、信徒ふたりとわたしとで話す。不在の信徒のようすを聞く。体調悪く「入院」(おそらくセンターに) となるも、これくらいで入院してられない、と本人の意思で寮に戻ったところ、お手洗いで転んで大腿骨骨折となり、高松にある病院に入院したという。苦痛にだいぶ暴れたと聞いているとのこと。骨折以外にも臓器不全などがあり、体力を考えると手術は「無理」だろうと。その方のお名まえが「偽名」だったと、代表は今回初めて知ったという。信徒同志でも数十年にわたって、そのひとの核にあたるかもしれないところを知らないばあいがあるのだと、あらためて知った。

その方やご自身のことを、「年なりのことが、からだに刻まれる」と代表が述べた。一時期は枇杷の実のおかげで(自分ではそうおもっている、とつけくわえていた) よくなった体調もこのところ悪く、注射を打っているという。「いま全体の平均年齢はどうなったでしょうね」という。「全体」とは 13 園全体でということのようだ。この日も「終末期」の語がなんども使われた。

霊交会信徒が 6 名になったと聞いた。おひよりはセンターに、もうおひよりは先日亡くなった方といっしょに礼拝に来ていたが、自分からまえへでてゆくひとではなく、もう活

*series* 話トリエ 02*W-atelier*02

動は3人でやってくこととなり、それもかなわないときもあろう、この100周年を機に活動を縮小してゆく、この100周年については「精一杯」やってゆく、とのこと。

「先生、講義のほうはどうですか？」と代表から問われる。この「講義」とはわたしから霊交会に企画提案した連続講演会のことだった。まえにファックスで送った企画案はどうでしたか？と問うと、福祉室にもみせたところとくになにもなかったとのことなので、ではあれで進めます、と応えた。〈話トリエ〉の企画の1つとなる霊交会創立100周年記念連続講演会の内容と実施が、ここに確定した。

園のあれこれの話になると、このところあちこちに消毒薬がおかれていると苦々しげに語られ、まるで「逆戻り」だとの指弾もあった。なにかしらの理由があつてのことかもしれないが、説明がたりず、理解されず、つまりは配慮に欠けるということだ。官有船も来年度は高松便のみとなり、庵治便はチャーター便になるという。官有船「せいしょう」「まつかぜ」を使うが船員を外部雇用とするということなのか、官有船が就航しないということなのか、情報がたりない。

ふたりが礼拝堂をでたあとひとり残って、このところ読んでいる『蜜蜂の生活』（モリス・メーテルリンク著、平野威馬雄訳、鶴書房、1942年）を手にとる。長田穂波によるとみてよい赤鉛筆による傍線や書き込みがある。傍線をたどり書き込みを読むと、療養所での自分たちの生活と「蜜蜂の生活」を重ねあわせて考えているようで、穂波の読書の痕



を読む作業がおもしろい。

図書室の大きな机のうえに、まだ三十日祭をむかえていない故人の遺影、遺骨、そしてその方の顔をかたどったクッキーらしいものが供えてあった。

しばらくすると、入り口の戸を開く音がして、「せんせい」という聞き

*series* 話トリ工 02*W-atelier02*

慣れた抑揚の呼び声が聴こえる——朝もいだ、という大量のトマトをいただいた。いい艶のトマトだった。こんどは内線電話が鳴る。交換での切り替えがうまくゆかず、なかなか話せない。代表からの電話で、霊交荘に飲みものと「つまみ」を用意してあるとのこと。場所を霊交荘に移す。彼には、お菓子もなにもみな「つまみ」となる。

納骨堂のお参りにいったとき、ちょうど「お昼まえの定時放送」(11:15)が流れる。盲人会の週日程にくわえて、その日の午後に NHK 総合で放送される『NHK アーカイブス』の紹介があった。曾我野一美さんの元気なお姿もみられる、とのアナウンス。故人は大島で自治会会長や霊交会代表もつとめた。

お昼の NHK ニュースは、早明浦ダムの貯水量が減り、第 1 次取水制限が始まったと報じた。帰りは雨となった。ひさしぶりのようだが、ダムに貯まるほどの降りようではない。朝の船からは、西海岸にいつもより多くの海鷗がいるようにみえた。高松港の棧橋でも、すぐ近くに 1 羽いた。琵琶湖の竹生島のようにならたいへんだ、とおもったが、それも人間のかってなつごうかもしれないともおもいなおした。帰りは 1 羽もいなかった。



サミシイオモイ

## series 話トリ工 02

## W-atelier02

家に帰ってから、録画予約した『NHK アーカイブス』をみる。番組予告では、今年5月にお亡くなりになった神美知宏さんと冨雄二さんを取りあげるといふし、多磨全生園の平沢保治さんの出演もあるという、しかし番組名が「アーカイブス」といふと再放送のようで、ようすがよくわからなかった。これまでこの番組はみたことがなかったかもしれない。

録画をみた。冒頭に神さんと冨さんふたりの偲ぶ会の映像、ついでふたりの活動を伝え、「偏見と差別」がいまも残るとの指摘があり、「おなじ過ちをくりかえさないためにどうしたらいいのか」とのナレーションののちに、「ハンセン病の悲劇を繰り返さない」とのタイトルが映しだされた。

場面は多磨全生園に移り、そこで「語り部」の活動をしている平沢保治さんが登場。NHKアナウンサーは、「いまも根強く残る偏見と差別、どうしてこういう状況が生まれたのか検証した番組があります」と紹介して、2001年の『NHK スペシャル』で放送された「ハンセン病 隔離はこうして続けられた」が再放送される。大島の園内放送にあったとおり、曾我野さんの姿が2度映しだされた。彼へのインタビューでは、「隔絶されたところの、隔絶されたたたかい、無力感と虚しさ」とこれまでの活動がふりかえられていた。

この再放送が終わると、場所が多磨全生園の「敷地内」(NHK アナウンサー)にある国立ハンセン病資料館の1室にかわる。ここでは平沢さんによる、子どもたちに語りつぐ活動が紹介され、その交流を描いた映像があると、2002年放送の番組の一部が放映された(タイトル不提示)。ここで平沢さんは子どもたちに、もしハンセン病が<sup>うつ</sup>伝染るのならば、講演に呼ばれても出かけない、おなじ思いを味あわせたくないから、という趣旨のことを述べていた。

つぎに、平沢さんにとってのうれしいことというアナウンサーの紹介で、2008年に放送された、平沢さんの母校での講演の映像が、ここでもまたその一部が放映された(これもタイトル不提示)。68年ぶりに訪れた母校だという。再放送終了後のアナウンサーによるインタビューで平沢さんは、「生まれたところはあっても、ふるさとはない」、しかし母校への再訪が実現したことで、「やっとわたしに帰るところができた、家ができた、肉親が

## series 話トリ工 02

## W-atelier02

できた」とそのよろこびを語った。

しかし、「いまでも複雑だ」とも明かす。

でも肉親のひとたちはどうしているだろう、このこと〔母校での講演か〕によって生活権が奪われはしないか、このことによってお嫁にいたり、お嫁をもらっている肉親のひとたちになにかおきないだろうか、よろこびと苦しみてゆーか、よろこびが3、苦しみが7だ、同級生が240人ぐらいいたんですけど、すぐ近くに住む、わたしの一、畑や田んぼの近くに住んでいるひともね、歳1つ違いですけど、来てくれて、おなし町内のふたりも来てくれたけど、そのひとたちが、わたしの弟や、あるいは親戚の話はひとつこっとも口にしなかったんですね、そのことを考えてね、これ、これでよかったのかと話した。ついで、

やはり、われわれの最終的な目的は、生まれ故郷にいて肉親とね、団欒することができりゃあね、そのとき初めてわれわれは、ハンセン病問題は解決したといえるんじゃないか、〔婚姻などで〕肉親が広がることによって、ハンセン病は血統病だとか、そういうむかしの因襲、差別、それを位置づけてきたらい予防法、そういうものがまだ払拭されていない、だからわたしは、それが正しいかどうかわからないけれど、まず肉親の足元からハンセン病問題の正しい知識を普及しなければ、いつになっても肉親の生活権をまもれないから、反対はあるけれども、ささやかにつづけていこうとの決意を語った。このあと、「ハンセン病のような、2度と過ちがおきないように考えていただきたい」との平沢さんの言葉で、この日の『NHKアーカイブス』は終わった。

NHK ホームページにある『NHKアーカイブス』のサイトでは、再放送された番組の情報が掲載されていた（2014年7月7日閲覧）。さきのNHKスペシャルは2001年6月16日放送。そのつぎが2002年5月3日放送『ホリデーにつぼん』の「いのちの森で～ハンセン病元患者と小学生～」、最後が2008年12月4日放送『ニュースウォッチ9』内の「ハンセン病患者68年ぶりに帰郷 母校の児童たちに思い語る」だった。

番組の始まりと終わりで2回、過ちをくりかえさない、といったことがナレーションと

## series 話トリ工 02

## W-atelier02

当事者によって発信されているのに、なぜこの日の番組タイトルは、「悲劇を繰り返さない」なのか。ハンセン病をめぐる過ち、または、暴力、非道、理不尽、不条理、暴政、圧政、暴虐な仕打ち、をくりかえさない、としなかったのか。こうしたタイトルのつけ方にも、ハンセン病をめぐる感傷という事態が濃厚に籠っている。一般に「悲劇」の語は、「悲惨な、また不幸な出来事」(『広辞苑』第6版)の意味で使われる。だからタイトルに入れる語としてまるで不適切ということでもないのかもしれないが、平沢さん自身は「過ち」(=失敗、過失)をくりかえさないようにと願っていたのだ。ハンセン病は感傷と結びつきやすい、結びつけやすいが、なかなか怒りという感情や意思は引きだされないということか。

過ちへの対抗として平沢さんは、「正しい知識」をあげていた。しかもその「普及」は、「肉親の足元から」必要なのだと唱えられていた。80歳台となった平沢さんにとっても、おそらく肉親は弟妹や姪甥なのだろうが、そうした若いものたちに、自分の行動や意思や主張がどう影響するかがいまま気になりなのだとということだ。自分が話したり動いたりすることによって、肉親になにもおこらないように社会も世間も「正しい知識」を知って学んでほしいという要望とともに、ここには肉親もまたそれを獲得してほしいという切実な願いがあるように感じた。癩そしてハンセン病を発症したのものたちの多くが、肉親のことをおもって、わが身を家から家庭から引き離したのだから、そのことを、その理由を背景を、その仕組みを肉親にも知ってほしいという望みである。第三者の、非当事者のかつてな付度を恣にしたのではない。本稿の最初のほうで書いた「問え」の所在を考えてみたい、「生活権」というとき、それをまず「肉親」が保持すべきものとして提起するようすを注視したいのである。

大島で、三宅官之治顕彰建立の発起人のひとりについて話題にしたとき、彼は、結婚まえの姓が三宅だった母から官之治のことを聞かなかったとのことだ、とわたしが話したとき、その場にいた在園者も、自分の姪も甥も知らないといっていた。これはハンセン病を知らないということであり、自分の身内にハンセン病に罹ったことのあるものがあるとは知らないということなのだろう。(このときなぜか、三宅さんに眉毛があったか、というこ



series 話トリ工 02

W-atelier02

とも話題にのぼった)

伝染病が、ひとからひとへと伝染るとき、それゆえに、その病がひととひととの関係を、つながりを大きく深くかえてしまう。ここにいうひとが、みぢかなものであるとき、伝染病がもたらす損壊も深く、大きく、長期にわたることとなる。もう親も兄も姉も亡くなり、子も孫もなく、しかし残る肉親がいたとしても、その団欒が依然として挫かれたままのばあいがある、とあらためて知った。